

●論文

キリスト教信仰の証しとしての社会貢献 東方敬信

座右の銘

「この世で富んでいる人に命じなさい。高慢にならず、不確かな富みに臨みを置くのではなく、わたしたちにすべてのものを豊かに与えて楽しませてくださる神に望みを置くように。善を行い、良い行いに富み、物惜しみせず、喜んで分け与えるように。永遠の命を得るために、未来に備えて自分のために堅固な基礎を築くようにと。」「新約聖書」

目次

-
- 序. 勝者の呪い 経済の最適行動のディレンマ
日本近代化の問題：「近代的民主的人間の創出」
 - 1. 大原孫三郎の信仰と事業 地方文化の特徴 義倉精神
 - 2. 明治初期の基督教文化圏とキリスト教友情論
大原孫三郎の主な事業 益者三友
 - 3. 大原孫三郎の職業倫理
 - 4. 大原孫三郎の信仰
 - 5. 開かれた論証：「合理的愚か者」を越えて

キーワード

勝者の呪い (spell of winner)
神の前での平民主義 (the democratism under God)
安息日厳守 (observing Sabbath)
教養教育 (liberal education)
健全な家庭 (healthy home)
社会貢献 (social contribution)
人格尊重 (the respect for the person)
スチュワードシップ (stewardship)
科学実験と証し (the scientific experiment and the witness)
キリスト教信仰の証しとしての社会貢献
(the social contribution as the Christian witness)

The Social Contribution as a Christian Witness
by YOSHINOBU TOBO

座右の銘

「この世で富んでいる人に命じなさい。高慢にならず、不確かな富みに
臨みを置くのではなく、わたしたちにすべてのものを豊かに与えて楽し
ませてくださる神に望みを置くように。善を行い、良い行いに富み、物
惜しみせず、喜んで分け与えるように。永遠の命を得るために、未来に
備えて自分のために堅固な基礎を築くようにと。」「新約聖書」

序. 勝者の呪い

「勝者の呪い」という言葉は、最初にアメリカの石油会社のエンジニアが口
にしたと言われている。この場合の勝者は、利益を得るための最適行動をした
人のことである。利益最大化を狙って行動できたはずなのに、勝者の呪いは、
その勝者の利益の最大化の狙いや最適行動が成功したように見えて実は呪われ
た結果に終わってしまうというディレンマである。

例えば、幾つかの石油会社が、ある鉱区の採掘権をめぐる入札をしようと
する。各社は、あらかじめ専門家からその鉱区の価値について分析をしてもら
い、ほぼ客観的にその評価額の見積もりをもっている。入札によって採掘権を
得るわけであるが、最終的にはより高く見積もって落札価格を表示したところ
が採掘権を得ることになる。つまり、競売で勝つことは、一番高くつまり過度
に見積もった会社がそれを得ることになる。ところが、落札価格がその鉱区の
実際の価格より上回るなら、損をする可能性が高い。しかし、採掘権を得るた
めの最適行動は、過度に見積もることとなる。その意味では損することにな
る。採掘権を得る競争に勝利する最適行動は、人より高く落札価格を設定す
ることで、そうすることにより最適行動をとっていながら損をする結果になる。
このディレンマは、行動経済学のR・H・セラーが『勝者の呪い』（日本語
の題名『市場と感情の経済学』）で紹介した。

さらに心理学の事例としては、次のものがある。Yさんは、四十代半ばの会
社員で、子供の頃からの良い学校、良い成績、良い会社がいかに重要であるか
という価値観を母親から叩き込まれた。Yさんの母親は、地方の名家の出身
で、親戚に有名な政治家や財界人が多くいて、よく勉強もし、成績が実際に良
かったが、ただ実家では女性が勉強するのを評価しなかったのが、高校を卒業

しても望んでいた大学行きには賛成が得られず、いわゆる花嫁修業をさせられた。そのお母さんは、そういった悔しい思いを長男のYさんに託して、Yさんを良い学校、良い会社という路線にすすむことを期待した。彼は、その期待にこたえて見事に有名な企業に入社し、父親の知り合いである地元の大地主の娘さんと見合い結婚をした。そこまでは人生順風満帆であった。ところが、彼が部長になったとたん問題が生じた。彼の昇進が告知され、部長としての地位を獲得したことを、周りとはとても喜んでいて。彼も喜ぶはずであった。はずであったと言ったのは、その矢先、彼は氣力がなくなり、仕事が手につかなくなり、会社に行こうとすると、体全体がだるくなって動けなくなった。これを「昇進うつ病」という。

なぜ、人が競争原理に追い立てられるのか、よく考えると不思議なことである。近代社会は、競争原理で経済成長してきたと考えられる。市場経済の世界では、人より立派な商品を作って、人より多く売って勝利をすることが競争である。この経済原理の世界は、学校を中心として学習社会でも、活力源を提供してきた。あるいはひそかな仕方で嫉妬心や羨望が成長の動機となってきた。しかし、この競争に勝ってエリートになるというエリート主義という価値観で無理やり競争するのも限界がある。それは競争に疲れることである。エネルギーを出し切って無能力になる疲れである。つまり、競争原理で生きる社会では、いつか無能になる、すなわち能力の限界に達してしまうのである。心の中に向上心を持ち、良い仕事をしたいとか、もっと満足できる仕事をしたいとかその努力をしているかぎり、その人は、無能の状態を目指していくことになる。こういったパラドックスは、価値あるものが自分の判断ではなく、他との競争で決まってしまうからである。自分本来の満足ではなく、市場価格における価値観で考えてしまうからである。

ここで大切なのは、「良い子主義・エリート主義」の一元論から無能への道を一直線で歩むのではなく、自分らしい主体性を獲得して、多様な価値観に気がつくことであろう。そこで、私たちが考えたいのは、競争原理ではなく、尊敬すべき何者かに委ねられたと考える「委任原理」と友情に生きる「共存原

理」ではないだろうか。つまり嫉妬心と羨望で争いあうのではなく、共に支えあい協力して責任を果たそうとして生きる喜びを知る「責任原理」ではないだろうか。キリスト教信仰で言えば、「受託精神（スチュワードシップ）」の職業観ということになろう。¹⁾

日本の近代化についての勝者の呪いを考えてみたい。経済史の大塚久雄氏は、日本の資本主義の発展は、「近代的民主的人間」によらなければならないと予想したが、それとはまったく違った仕方で発達してしまったのが日本の産業界だといえる。大塚久雄の1946年の「近代的人間類型の創出」という論文は敗戦直後に書かれたが、日本の行く末を案じて、日本がまだ十分な市民社会として成熟していなかったことを理由に挙げて「近代的資本主義の形成」と「民主的市民社会の形成」を重ね合わせて提案していた。「ヨーロッパにおいては彼らの内から民主的・政治的主体が自生的に見い出されつつ近代的・民主的経済機構が順調に創出されたのに対して、わが国では民衆の間に近代的・民主的人間類型をあまり見ることがない」と書かれている。大塚は、敗戦後の国力を回復するために、経済復興の前提条件として近代的・民主的人間類型がなければならないと主張した。その近代的・民主的人間とは、市民社会のなかで切磋琢磨して作られてくるということである。ところが、最近の企業の不祥事をみると、日本の資本主義の発展は、大塚久雄の予想とはまったく違った仕方で発達してしまったといえる。とても近代的・民主的人間の生まれた市民社会とはいえない。しかし経済行動の積み重ねによって戦後の経済発展がなされた。これが日本の勝者の呪いという重要な検討課題であろう。

1. 大原孫三郎の信仰と実業

以上の問題意識の下で近代日本社会での企業家の経営理念と社会貢献を検討して、政府の失敗、市場の失敗の後で、21世紀の職業観と社会貢献をという意味で大原孫三郎の職業観を考察していきたい。

1) 東方敬信『神の国と経済倫理』（教文館、2001年）61頁。

地方文化の特徴

倉敷といえば、素晴らしい柳の枝が風になびいている倉敷川と大原美術館、さらに倉敷紡績工場あとにつくられたアイビー・スクエアというホテルと資料館さらに、白壁の屋敷を思い出すにちがいない。大原孫三郎の伝記を記した城山三郎の名文には、次のようにある。

「倉敷といえば、大原美術館。その美術館を振り出しに、倉敷川を囲み、かなりの範囲にわたり、古い家並みが整然と保たれており、古き良き昔へ一気にタイム・スリップさせてくれる。このため、いつ行っても人の波の絶えることがない。美術館への出入りの客、街並みに見とれる客、カメラを構える客と、道も自由に歩けない日もある。そうした中を抜けて、アイビー・スクエアに至ると、そこもまた人、人、人。倉敷紡績の最初の工場跡であり、イギリスから大切に運んできた赤煉瓦を積み上げた壁を、アイビーつまり蔦が蔽い、春から夏はあざやかな緑、秋には濃いルビー色に染まる。その美しい壁に囲まれた広場でも、人々がのびやかにくつろいでいる。人口四十二万の倉敷市。その中心の『美観地区』と呼ばれる一帯への年間観光客数は百五十万人にたっする。」²⁾

しかし、聖書の言葉に基盤を置いた人々が生まれたところとして、倉敷にはある背景があった。明治20年に倉敷紡績株式会社が徳川孝四郎によって設立されるが、それ以前に徳川幕府は、倉敷を天領として幕府の直轄地にして、あたりの農商工業の中心地にしていった。直轄地の特権は、年貢が安くされたこと、さらに代官所が置かれて裁判がそこで行われた。したがって、クラシキモンは、天領としての誇りを持っていた。近在の人々は「クラシキモン」とけんかをするなど言っていた。また物資の集合する場所として、白壁の土蔵が作られ、運河まで造られて利用されていた。そのため、クラシキモンは、まわりの人たちには威張った感じを与えていたと同時に、天領としての一種の治外法権をもっていたので、他の藩から逃れてきた人たちをかくまう義侠心ももっていた。それがあるときは、弱いものを保護するという「隣人救済の精神」を呼び

2) 城山三郎『わしの目は十年先が見える』新潮文庫改訂版(1997年)。

起こして、正しい人が苦しんでいたりしたら、援助を惜しまないという正義感も培っていた。そのような土壌にキリスト教信仰が宣教師によって種まかれ、キリスト教精神によって社会と隣人に奉仕する人物たちが生まれたと言える。逆にいえば、クラシキモンの気質がキリスト教を受け入れる下地となっていたと言える。

ところで、大原孫三郎が生まれた前年の倉敷の戸数は1682戸、住民6061人に過ぎない。40万人を越す今の倉敷市からは想像もつかない小村である。そうした小さな地域、それも実際はさらに限られた数の旧家の間から、キリスト教を受容する進歩的な人びとが出ているのは、単なる偶然とは思えない。また、倉敷自体は小さな村であったが、代官所は倉敷だけでなく、備中・美作・讃岐の幕府領全体を管轄し、その産米を集めて大坂に送り出す重要な仕事を果たしていた。一説によれば、〈倉敷〉の地名は、米や繰綿を納めた蔵屋敷が立ち並んでいたことに由来すると言われる。このように倉敷は、村といっても、中四国の幕府領をはじめ周辺地域の物産を大坂や江戸に送り出す重要な拠点だっただけに、商家が多く、普通の村にくらべるとはるかに豊かだった。秋山、大原、山川、大橋、宇野は、という家から出た者は、いずれも上京して勉強しているが、そうしたことが可能だったのも、ある程度豊かな家が多かったからである。

倉敷は、瀬戸内海の子島湾の埋め立てによって出来た土地で、たかだか数百年の歴史をもつだけの新開地であった。どこでも、新開地は古い伝統・慣習から自由な傾向があるが、とくに倉敷は、税金が安いという点に、代官所の管轄に対応して商圈が広がった。進取の気象に富む人びとが、こうした場所に移り住み、自分の力で自分の運命を切り開こうとしたであろうことは、容易に想像できる。日本にはヨーロッパのような自由都市がなく、武士が民衆を直接支配する城下町ばかりだったといわれるが、どうやら倉敷は長崎や京都などとならんで、日本では例外的な土地だったようである。あえて言えば、自由都市に近い性格をもっていた。倉敷が豪商の町であったことが武士の思想である儒教でなく国学が定着する条件となった。国学は儒教とともに仏教を目の敵にし、その

ため幕末の国学に染まった地域は明治になってキリスト教が入り易かったというのである。

義倉精神

その下地として指摘しておきたいのは、倉敷には、18世紀の中頃から、有力な町人による〈義倉〉という自主的な困窮者救済の組織がつくられていたことである。〈義倉〉は、藩がつくらせた〈社倉〉と違い、民衆が〈おかみ〉に頼らず、自分たちの生活を自分たちで守ろうとするもので、自主的、自律的な性格をもつ住民がいなければ成り立たない制度である。1769年(明和6年)から始まった伝統と言われるが、村人全体で組織的に計画された福祉対策である。それは、倉敷の人々に相互扶助の精神を実行する尊い伝統で、凶作のときには貧しい農家に無利子で麦の種を提供し、老人を介護し孤児たちを育てたのである。この江戸時代の相互扶助活動を「続義倉」として再開したのが、倉敷の林芋一であり、キリスト教信仰へ入っていく家族たちであった。倉敷紡績の最初の頭取であった大原孝四郎は、この地方で育英運動を起こし、貧しい人々に教育を受ける機会を提供していた。彼は、明治41年までに、69人の若者に奨学金を提供している。これも義倉精神の表れと言えよう。このような倉敷の気質がキリスト者になった大原孫三郎によって開花していくのである。天領である倉敷は、年貢が安いので、破綻した近隣の人々は出エジプトのたとえによって「小カナン」に向かって旅立ったという言い方もされている(石井十次)。

2. 明治初期のキリスト教文化圏

ここで、倉敷にキリスト教を伝えた宣教師たちの働きを紹介しておこう。岡山県のキリスト教は、宣教医つまり、宣教師であり医者であるベリーというアメリカ人がキリスト教信仰を伝えた。岡山の当時の県知事は、日本の医術の遅れているのを発展させようとしてベリーを歓迎し、案内役までも演じている。その意味では、岡山県のキリスト教は医者や薬問屋などの比較的インテリ層に

入っていったと考えられる。宣教師の働きは、そういうベリーがキリスト教信仰も語り、日本人牧師も同行するという方法であった。たとえば、のちに早稲田の教授になって学生をアメリカに連れて行き、野球を覚えさせ、日本に初めて野球を導入した安部磯雄という牧師は、ベリーと同行して、岡山の各地に行っている。1880年明治13年で、ベリーが113人の患者を学校に行って診察し、キリスト教の集会には50人集まるという記録が残っている。³⁾

そこでの宣教師と日本人牧師の活動は、神の前での人格の尊厳を徹底し、ある人物の回顧には「士族の魂も、町人の魂も、赤裸々になって神様の前に出る時は同じ値打ちのものである、と申されたことが私の心を捉えました。」とある。この考えが、女性を大切にする山陽女学校の設立や、工員たちの福祉を考える大原の経営方法になったと言える。その他には、安息日の厳守が上げられる。工場を日曜日に休みにし、読書や絵画の道具を持って人間教育を心がけた。これが大原においては美術館になる。さらに、ピューリタンの世俗内的禁欲というエートスといえるが禁酒運動と健全な家庭生活があった。

1) 大原孫三郎の主な事業

このような歴史的な背景を持っている倉敷であるが、その中心としての倉敷紡績は、大原孝四郎によって設立され、大原孫三郎によって近代化され、発展した。さらに日本の社会科学の歴史に関心のある人なら、誰でも「大原社会問題研究所」を思い出すであろう。今は、法政大学の中にあるが、日本の社会思想の牙城となった研究所で、大内兵衛、森戸辰男、笠信太郎などの進歩的学者、研究者をそだてた。さらに有名なのは大原美術館で、昭和7年、満州事変調査のときに来日したリットン調査団の一部の人達が訪れ、エル・グレコなどの名画が東洋の地方都市にあるのに目を丸くして驚いたという話がある。そのことのゆえに、第二次世界大戦の時にも、世界の名画があるクラシキを、連合軍の爆撃目標からはずしていた。大原孫三郎は、中国銀行の最初の頭取にもな

3) 竹中正夫『真人の共同体』（新教出版社、1962年）58頁。

り、中国電力の創設にもかかわったが、倉敷労働研究所、大原農業研究所を設立したりした。さらに、その時代に注目すべき点は、倉敷紡績の中に「倉敷中央病院」をたて、それをオープンしたが、これを広く社会に解放して、平等、無差別に誰でも受け入れる総合病院にした。

その大原孫三郎は、1880年明治13年に、倉敷村の豪農の三男にうまれた。若くして父親の紡績事業を継いで、明治、大正、昭和の三代にかけて「キリスト教ヒューマニズム」と「科学的合理主義」をもって、企業経営に、社会事業に、あるいは文化事業に多彩な活動をしたスケールの大きな実業家であった。ここでは、その全生涯を追跡する暇はないが、キリスト教信仰とこのスケールの大きな実業家がどのような関係であったかを紹介したい。

彼が明確なキリスト教信仰とその使命感を持っていたことは有名であるが、そのキリスト教信仰は三人の友人を抜きにしては語ることが出来ない。彼は、実業家として活躍するが、三人の友人によって支えられながらキリスト教信仰に生きていた。このことは、きわめて重要である。なぜなら、キリスト教信仰は、個人の悟りの世界ではなく、神と人、人と人の友情の世界だからである。もちろん、その中心には、神から遣わされたイエス・キリストに現われた神の赦しを伝える教会における愛の教えがあるのである。

2) 「益者三友」

アリストテレスは友情を三つに分け、「有用性のための友人」、「快樂のための友人」、そして美德を認め合う「究極の友人」とした。もちろんポリスを持続させるのは三番目の美德を認め合う友人たちである。この究極の友情において、人間は他者を鏡として自分を認識し、「友は第二の自己である」とする。しかし、現代倫理学者マーサ・ナスバウムによれば、アリストテレスは友情の島において誰かが逆境に落ち込むという脆さ (fragility) を知っていたと言う。もし、ひとが伝染病や破産という不運にあったなら、彼はだまって英雄の島、美德の島から一人離れていかなければならないのである。これがアリストテレスの友情論に含まれるヒロイズムである。つまり破れの経験は、友情の限界を

示していた。しかし、十字架の苦難を経験したイエス・キリストの救いの愛アガペーを中心にした礼拝共同体は、破れの中でこそ愛を分かち合う友情をもつのである。それがキリストの体という共同体の特徴である。⁴⁾

さて大原孫三郎は、強烈な個性を持った三人の友人たちの人格的出会いによって育まれ、それを「益者三友」という。大原は、

「真友・自分の短所を指摘し、親切に直言する友としての森三郎

諒友・真実で表裏なく、信頼しうる友としての林源十郎

識友・世間の事理に通じ、それを教える友として山川均」

と表現している。これらを、少し順序を変えて説明していこう。

彼自身の言葉によれば、強烈な個性を持った三人の人たちの人格的出会いによって育まれたので、「益者三友」という。

山川均

最初は、キリスト教から出発してキリスト教社会主義さらにマルクス主義になって行った山川均である。山川は、大原と同郷であり、幼馴染みで生涯友情を保っていた。ということは、大原は、資本主義社会の内部矛盾についての理解を持っていたということになる。さらに資本主義に対する批判的距離も保つことが出来たということである。したがって、倉敷紡績の中に労働者村を作る構想を持ったり、倉敷労働研究所、大原社会問題研究所、大原農業研究所を設立したりしたことにつながるのである。

山川のキリスト教は、教育勅語と相容れないものと確信し、1900年に不敬罪で投獄された第一号となっていた。山川は19歳の時、友人と出した新聞『青年の福音』に大正天皇の結婚を批判的に論じた小文を載せ、これが日本最初の不敬罪に問われて実刑を受けたが、孫三郎は巢鴨監獄に彼を訪ねている。親戚以外は会えない規則で、実際に面会は出来なかったが、この事実を出獄時に聞かされた山川は「当時獄中に私を訪ねることは、好意のほかに、そうとう

4) S・ハワーワス『美徳の中のキリスト者』東方敬信訳（教文館、1997年）、68-94頁。

の勇気が必要だった。私は旧友の友情に心から感謝した」と記している(『山川均自伝』231ページ)。その後、倉敷に戻った山川は、孫三郎のエンサイクロペディア・ブリタニカを借りて勉強するなど親密な関係を保っていた。しかし、山川は、聖書の合理的なところだけを信ずればよいと考え、「地上に正義と愛と道の天国を建設する運動の記録」であると考えていた。つまり、この世の権力に対する抵抗の書だというのである。これは、いささか自分の理想を聖書の世界に投影する解釈の仕方であった。

林源三郎

第二の友人は、教会にしっかりと結び付いたオーソドックスな信仰者林源十郎であった。林家と大原家は、三代にわたって密接なつながりがあるが、放蕩に明け暮れていた東京専門学校(現早稲田大学)時代の孫三郎を父孝四郎は呼び戻し、この林源十郎に預けるのである。とりわけ1889年に林が洗礼をうけてキリスト者となつてから、生涯大原をキリスト教信仰において正統的な方向へと導いて行つた。大原は、優秀な人物であったが、親の事業を引き継ぐことを重荷に感じてかなり荒れた青春時代を送っていたが、林源十郎にさそわれて、これもキリスト者である岡山孤児院をつくった石井十次の講演に連れていき、キリスト教信仰に糸口を作った。彼は、同志社で学んだクリスチャンで、家業に熱心な人格者として、周囲の尊敬の的であった。源十郎に指導された大原は、洗礼を受ける前に「余がこの資産を与えられたのは余のためにあらず、世界のためである。余に与えられしにはあらず、世界に与えられたのである。余はその世界に与えられた金をもって神の御心により働くものである」と言っている。これは、まさしく「創造の秩序」に生きることを自覚したスチュワードシップの思想である。1905年明治38年に倉敷教会で洗礼を受けた大原孫三郎は、翌年26歳で、倉敷紡績の社長に就任する。企業の発展と社会事業と信仰の業とが一つとなつていく、ある理想を描くのである。それは、「倉敷を東洋のエルサレム」にしたいという希望であった。ここで、倉敷紡績の共同体作りがどのような基本理念に基づいていたものかを確認しておきたい。1883年(明

治 20 年) 倉敷紡績株式会社が創立されたとき、大原孝四郎が好んでいた「同心戮力」(どうしんりくりよく)を社是としている。この同心戮力は、孔子の史書『春秋佐氏伝』にある言葉であるが、猟犬は山に入るまで互いにけんかしながら猟師についていくが、いったん山に入ると力を合わせて獲物とり専念することから、互いに協力して心をひとつにすることを意味していた。大原孫三郎をキリスト教信仰に導いた林源十郎は、この四文字を聖書的に解釈して次のように述べている。「さらに私の考えます事は、会社や商店のみでなく、同心戮力の必要なのは神の国拡張事業である教会において、さらに一層切実なものであると考えるのであります。コリント前書 12 章に教えられたるよう一人ひとり与えられたる立場、才能によりて働きは異に致しましても、一致協力、ご事業に対しては一つになりて努めねばならぬと感じます次第であります。⁵⁾」と。このようなキリスト教共同体の理解と社会変革への情熱が大原孫三郎を育てていったと考えられる。「ひとつの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、ひとつの部分が尊ばれれば、すべての部分が共に喜ぶ」という「キリストの体」という教会の性格から、さらにそれを世界に拡大していく神の国の証しへの意欲が見られる。ここに経営者の上から目線ではない、新しい共同体への意欲が見られるのである。

森三郎

第三の友人である森三郎は、大原が東京専門学校⁶⁾の学生であったときの友人で、東京大学の農学部で学んでいたが、足尾銅山に大原を連れて行って、公害汚染の恐るべき現状を教えたのである。さらに、森は、大原に二宮尊徳の『報国論』を示して、その書より大原は聖書と共に影響を受けている。彼は、千葉農業試験場の所長として活躍した。大原より 11 歳年上であった森三郎は、大原の生涯の友となった。

5) 竹中正夫『倉敷の文化とキリスト教』(日本基督教出版部、1979 年)、40 頁。

その他の重要人物

さらに、彼に影響を与えたのは、日本で最初の孤児院を岡山で開催した石井十次である。それは、林源三郎が聖書を教えると同時に、石井を紹介したのである。石井十次は、医学生であったが、あるとき貧しい女性の子供をあずかって育てはじめたのがきっかけで、その子供が次々と友達を呼んできて、孤児院を作るのである。親に捨てられた子供たちの施設である孤児院をつくってキリスト教信仰を実践するのであるが、その事業の応援を大原は、石井十次がなくなるまで続けている。石井氏は宮崎県の人で熱烈なキリスト教徒であったが、遂に世界的に有名な岡山孤児院をつくりあげた。1907（明治40）年には大阪と東京にその事務所を設けて、愛染橋保育所、夜学校、同情館等をつぎつぎに開設して、孤児養育の外、貧民療養、教育、職業紹介、免囚保護、売笑婦救済など、多面的な救済事業を行った。大原孫三郎は、彼の強い影響をうけてキリスト者となっただけに、孤児院の後援者となった。大原氏はまた早くより民衆の啓蒙教育に意を注ぎ、1902（明治35）年より徳富蘇峰らをまねいて倉敷日曜講演を催した。大原はまたロバート・オーエンに傾倒して理想的な産業社会を夢みたといわれる。しかし、石井の晩年は、キリスト教信仰があやしくなり、東洋的な天なるものを信じる天信教ということを言い出した。大原の信仰は、石井十次の動揺によってかなり影響を受けたようである。それは、神との関係をキリストの十字架の愛を媒介にして結ぶものであったが、日本社会では、キリストが私たちを愛されたように互いに愛するというものより、義理人情の親分肌の付き合いが濃くなる危険もある。

そこで、倉敷教会を指導した最初の牧師溝手文太郎牧師の言葉を通して、当時の信仰共同体の精神風土を確認したい。

「いともちいさき虫にひとしき此身にも

聖聲かかりし今日の嬉しさ」⁶⁾

溝手牧師は、祈りの人であり、密室でひとり祈る時をもっており、聖書をつ

6) 同上書、136頁。

ねによく読み、信徒たちに良い感化をあたえていたが、歌人でもあった。紹介した言葉は、聖書のイザヤ書を引用しながら、きわめて謙遜にその信仰の喜びを語ったものである。これは、上から目線で人間関係を支配しようとするのではない信仰の喜びを表現していることが分かる。竹中正夫によると、溝手牧師は「謙遜な人格のなかにこもる福音的な敬虔な信仰は倉敷教会の初期の人々に深い感化を与えた」とある。その初期の人々の中に大原孫三郎も含まれていることは言うまでもない。

3. 大原孫三郎の職業倫理

そのアガペー的真理に生きる倉敷教会は、大原を支えることになる。また石井十次の信仰が岡山のキリスト者を奮い立たせた。大原は、また早くより民衆の啓蒙教育に意を注ぎ、上述のように1902（明治35）年より徳富蘇峰らをまねいて倉敷日曜講演を催した。大原は、またロバート・オーエンに傾倒して理想的な産業社会を夢みたといわれる。彼のいと小さき者への愛は、聖書のマタイ福音書25章に「それはわたしにしたものである」というイエスの言葉を実践したキリスト者の姿であるが、私たちは、大原の労働者への態度として事実を指摘したい。

1918年、19年は、第一次世界大戦の刺激による異常な好景気を紡績業も迎えていたが、当時高利潤をあげた他の紡績業は株主配当率10割を実施するころもあったが、倉紡は、むしろあえて6割をもって最高とし、事業収益を従業員の生活環境の改善、衛生設備の充実、さらに労働者の株式取得を推進することにしている。さらに1921年には、それをもって人間労働の医学的・心理的研究を推進する「倉敷労働科学研究所」を設立したのである。

兼田麗子氏によると、紡績業において人道主義を示したのは大原孫三郎だけでなく、鐘紡の武藤山治という経営者がいたが、後者は、本来の人格の尊重というより、温情主義的な態度が見られたという。経済合理主義とタテ社会の人間関係が結びついていたのである。しかし、大原孫三郎はその温情主義とまったく違うという。「孫三郎は武藤が労働者に対して持っていた温情主義とは異

なるキリスト教的ヒューマニズムや人格的平等観に基づいて労働者の待遇を人間として改革しようとしたのであった」⁷⁾と把握している。それは、何よりもキリスト教的人間観に基づいた、資本と労働の共同作業の意識があったということになる。大原孫三郎は、あるとき次のように言っている。「生産会社にあつては従業員をただ生産の手段として酷使することは間違っている。労働を商品すなわち生産の手段としてではなく、その人格を尊び幸福の増進を図ることが肝要である。そして働く人にも資本家にも、双方共に偏らない利益をもつて経営を行なう労資協調は可能ではないか。労働と資本の完全な一致点を見出すため、具体的方策の樹立に努めなければならない。この理念が実現するとき、倉敷紡績の工場が労働と資本との共同作業となったときに他ならぬ」と。大津寄勝典は、この大原の「共同作業」を独特の労務管理つまりなるべく地域社会の通勤者を雇用すること、さらに飯場をやめて家族単位の寄宿舎にすることなど、また市民に開放する倉敷中央病院などの福利厚生施設のあり方、そして率先して従業員の病気などの不便を克服するための「共済組合」を設置、さらに労働組合という発想のない時代に、職工組合なるものを設置して、彼の労働理想主義を貫いたと評価している。⁸⁾

4. 大原孫三郎の信仰

倉敷紡績の社長として責任を果たし、中国銀行の最初の頭取であり、中国電力の創設にも関わった関西の大事業家であるが、社会事業を援助し、さらに多くの研究所を作り、文化活動として大原美術館を残した大原孫三郎は、しかし、驚くべき言葉を残している。それは、「自分の一生は失敗の歴史であった」と告白する言葉を、息子の大原総一郎氏に残した。それは、若き日に「倉敷を東洋のエルサレムとなさん」と考えた志をたてたが、それに充分到達する生涯ではなかったということである。つまり、キリスト教的ヴィジョンを果た

7) 兼田麗子『福祉実践にかけた先駆者たち』(藤原書店、2003年)、258頁。

8) 大津寄勝典『大原孫三郎の経営展開と社会貢献』(日本図書センター、2004年)、69頁。

しえなかったという慨嘆である。しかし、彼は、人間の尊厳についてはある種の感性を持っていて、倉敷紡績の女子工員については、いわゆる女工哀史というような貧しい女性を悲惨な状況に置くことを良しとしてないで、倉紡の社長であるかぎり、人事部長も兼ねて、女工たちの世話を大切にすることを実践した。さらに、倉敷中央病院は、最初は倉紡中央病院として自分の会社のメンバーを想定していたが、それだけではなく倉敷市の市民全員に開放し、貧しい人たちには無料で医療を提供したと言われている。彼には、人間の尊厳を客観的にはかる公正な判断力があったといえるであろう。

しかし、大原を導いたのは、ただの親分肌ではなく、教会で教えられた聖書の真理である。大原孫三郎が愛唱していた聖書の箇所は、テモテへの手紙一の6章17節から19節であった。「この世で富んでいる人に命じなさい。高慢にならず、不確かな富みに臨みを置くのではなく、わたしたちにすべてのものを豊かに与えて楽しませてくださる神に望みを置くように。善を行い、良い行いに富み、物惜しみせず、喜んで分け与えるように。永遠の命を得るために、未来に備えて自分のために堅固な基礎を築くようにと。」というテモテの手紙一6章17節から19節の言葉である。

息子の太田総一郎氏の父親についての文章は客観的であり、またその人柄をよく把握している。

父は自己の欠陥に対しては、つねにきびしく自省し、あらゆる努力を払ってその矯正に努めたが、それを改めつくすには、あまりにも強烈な感情の激発があって、それが自然におもむくところは、もはや二十歳前後の時代に復帰することを許さなかった。しかし、若き日の献身の精神は、片時もその脳裏から消え去ったことはなかったと思う。

父はぜいたくであったが同時に質素を尊び、虚飾的なぜいたくは心から軽侮していた。神経質で繊細な感覚は人一倍強くもっていたが、強健なるものへの趣味はそれらの偏向の上に君臨していた。遊びの中にも芸術への志向と、その社会にひそむ社会的罪害に目を閉じることはできなかった。

社会事業屋と呼ばれるべき人たちを非難しつつも、自らの理想をまでとてに葬り去ることはがえんじなかった。こうして、理解しがたいことからくる誤解と故意による誤解とに、つねにつきまとわれていたので、父の孤独は、今日のいわゆる「経営者の孤独」といったものとは、異質の、そしてはるかに多くの矛盾をはらんだ複雑深刻なものであった。

「自分の一生は失敗の歴史であった」とは、おりにふれて、父のよく述べ懐するところであったが、それは反省のことばというより、告白の響きをもっていた。そのことばの背後には、心なしか、いつも若き日の誓いが胸をさすのを押しかくしているような思いが感ぜられた」(『大原総一郎随想全集』)

孫三郎は倉敷紡績第四代社長となる長男の總一郎に自分の経営哲学を説いている。

「十人の人間のうち、五人が賛成するようなことは大抵手遅れだ。七、八人がいいといったらもうやめた方がいい。二、三人位がいいということをやるべきだ」。孫三郎は昭和14年に總一郎に一切をゆずった。晩年は、素朴な民芸を愛し、昭和18年に大原邸で臨終を迎えた。62歳だった。これほどの事業を成し遂げたというのに、繰り返すが「自分の一生は失敗の一生だった」と總一郎に語ったという。ここには親しい牧師の忠告が胸に響いていたことも事実であろう。⁹⁾

5. 開かれた論証：「合理的愚か者」を超えて

さてこのような大原孫三郎の信仰と事業を顧みて考えさせられるのは、1998年にノーベル経済学賞を与えられたアマルティア・センの「合理的愚か者」というコンセプトである。彼は、このコンセプトによってこれまでの経済学者の人間観を批判する。それは、ハイエクのアダム・スミス理解を批判して、自分

9) 土屋喬雄『日本経営理念史』(麗澤大学出版、2002年、) 502頁。

の人間観を明らかにしている。スミスによれば、利己的な者が、市場という「見えざる手」によって社会全体の利益を増進させる主張であった。その『国富論』の有名な文章を引用すると、次の通りである。「われわれが今夜も食事ができると期待できるのは、肉屋、酒屋、あるいはパン屋の慈悲心によるのではなく、彼らの自己利益に対する関心によるものである。われわれは彼らの人間性ではなく、彼らの自己愛に呼びかけるのである」¹⁰⁾ という主張である。つまり肉屋が肉を売るのは、消費者を幸福にしたいという愛情ではなく、金をもうけたいからである。消費者も肉屋を助けようと思って肉を買うのではなく、自分の食べたい料理を作ろうと思って自分の利益を追求するのである。これは一種のリアリズムであるが、市場によって意図しない結果である全体の幸福が見えてくるのである。つまり、「見えざる手に導かれて、自分の意図とは関係のない目的を増進する」のだとスミスは言う。ハイエクは、この意図しない結果として社会全体の利益を増進させるという説を真に受けて、そのまま自己利益の追求を是認することになる。これではまさに最初に指摘した勝者の呪いに陥る道であろう。

これに対して、センは、一回限りの商行為を考えるのではなく、継続的な商行為を考える。つまり、肉屋が正しい金額でよい肉を提供することによって経済行為をできるようにする持続の力を考える。これは、人間の習慣的行為には信頼感が必要だということを指摘するためである。ハイエクは、互いに利己心で行動して、社会全体が利益を増やすという分析が「深い洞察」であると評価するが、センは、それはすこしも深くないと批判する。すなわち、ハイエクの「意図しない結果」という説をそのまま経済学の人間観、社会観に受け入れることを「深くない洞察」だと皮肉まじりに言う。私たちが交換の行為が持続可能になるのは、互いの間の信頼感が必要だと日常生活の経験から判断できる。たとえば、同じ値段の野菜を買うにしても、いつも新鮮な野菜を間違いなく売っている店と、腐っていないにしても新鮮でない商品をいつも売る店とまた

10) アダム・スミス『国富論』一、大河内一男訳（中央公論社、1978年）、26頁。

たまに腐ったものを売る店を比較すると、私たちは、いつも新鮮な野菜を売っている店に行くようになるであろう。ここには信用という人間の動機が働くことになる。これを長い目で見ると、私たちの経済行為の中に信用あるいは信頼感が働いている証拠になろう。この信用とか信頼感はまさに倫理的行動である。このように、人間の倫理観をふくんでいるのが経済行為だと考えるとすれば、センのいう「正義感」、「信頼感」、また「共感」と「献身」が経済行為の中にあることも分かってくる。基本的には自由を中心に据えるセンの人間観には正義感があるのである。

彼の文章を引用すると、「しかし、正義に関する基本的考えは、社会的存在としての人間にとって無縁なものではない。社会的存在である人間は自己利益について心を砕くだけでなく、家族の成員、隣人、仲間の市民、世界の他の人々について考えることもできるのだ」とする¹¹⁾。そもそも、アダム・スミスのいう「見えざる手」の働く市場は、もともと利己心だけではなく、「公平な観察者」を心の中に抱いている人々の集まりであった。ということは、アダム・スミスの主張の中に正義感を見出すことになるのである。

現代において、アマルティア・センは、このような正義感の存在を認めようとする経済倫理と共存する経済理論を主張している。私たちは、アダム・スミスの「公平な観察者」という心の中の存在は、キリスト教の歴史の中で、信仰者を指導するアドヴァイザーのことを指していたことを知っているからである。¹²⁾

市場メカニズムが機能するためには、暗黙の関係つまり信頼関係がなければならない。センの言い方によれば、「絶えず訴訟を起こす必要なしに、交渉された契約を有効にするような」しっかりとした信頼関係という土台が必要なのである。センによれば、「互いの言葉と約束にある信頼の発達と活用は市場の成功にとって非常に重要な構成要素である」¹³⁾。そうだとすると、人々と社会の

11) アマルティア・セン『自由と経済開発』(日経新聞社、2000年)、300頁。

12) 梅津順一『近代経済人の宗教的源泉』(みすず書房、1989年)、230頁。

13) セン、前掲書、301頁。

間に信頼感を保証する教育や宗教の役割を強化することを考えなければならないであろう。このように考えてくるセンは、個人の利益だけを求める狭い人間観を土台にしてできた「合理的選択」の理論を批判する。そして、この狭い利己心による行動理解から離れるにしたがって、「共感」と「献身」を経済行為の中に含むことを理解しなければならなくなると言う。「共感」は、ある人の幸福追求という観念の中に他人も幸福を求めているという共感があるのである。さらに、共感は次のような良心的状況にも進んでいく。他人の貧困に対して良心の呵責を感じるとするなら、その他人の貧困を助けることができるなら、わたしたちを幸福感に満たすことができるようになるのである。ここには人を助ける幸福と言う幅広い幸福感も考えられているということになる。「献身（コミットメント）」というのは、自己犠牲を伴う行為もさすことになる。アマルティア・センは、このコミットメントを、同情に基づいて苦しみを和らげてあげたいという欲求ではなく、不正義の認識からくるものだと考える。まさにあるべき社会と現実のギャップに注目する認識の力を考えているのである。これも、人間は社会的存在だから、社会の正義を望むようになるからだと言う。ここで、キリスト教を考えるならば、イエス・キリストの十字架の自己犠牲的愛を反映するものとして献身を考えるであろう。

大原孫三郎に戻るとすると、私たちは、キリスト教信仰の証しとして彼の経済行為を理解することができる。なぜなら、科学が実験結果を必要とするように、キリスト教信仰は、証しというものをもっているからである。「キリスト者が自分を理解するのに、またキリスト者でない人にも理解できるようにするのは、証しが必要である。それは、ちょうど学問の知解可能性が実験の成果によるものだと言うことと同じである。マーシャルは、たしかにキリスト教の殉教者がよるこんでキリスト信仰のために生命をかけたのは、科学者が実験結果に生命をかけたのと同じであると論じる」¹⁴⁾。そして、この証しの行為は、他の説明の仕方にも開かれているが、その行為のより大きな脈絡がキリスト教信

14) Stanley Hauerwas, *With the Grain of the Universe* (Grand Rapids, MI: Brazos Press, 2001), p.212.

仰にあることも確かである。それは、神から委託された仕事という意味を土台としたスチュワードシップの神学となるであろう。

The Social Contribution as a Christian Witness.

by YOSHINOBU TOBO

The church as a gathered community can provide the moral and practical support necessary for its members to live out an ethic of property. This support includes practical help for those whose generosity has left them in material want, but even more centrally it is a matter of providing a context of intelligibility for decisions that would otherwise seem irrational. Such a context must be sustained by ongoing community activities of remembrance and hope. I would like to take Ohara Magosaburo's life and work as a good example.

I think the life of virtue, friendship and happiness are tightly interwoven. Ohara had three helpful friends: Yamakawa, Hayashi and Mori. They supported Ohara, taking responsibility for Kurashiki Bouseki in the context of the Church and the social contribution. Witnesses must exist if Christians are to be intelligible to themselves and hopefully to those who are not Christians, just as the intelligibility of science depends in the end on the success of experiments. I would like to introduce their friendship and faithful works to the readers and make some analytical comments.